



黒潮の偽証



黒潮の偽証 定価240円

昭和38年6月20日 第1刷発行

著 者 高 橋 泰 邦

© Yasukuni Takahashi 1963

発行者 西 村 俊 成

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大光堂黒岩製本所

発行所 東 都 書 房

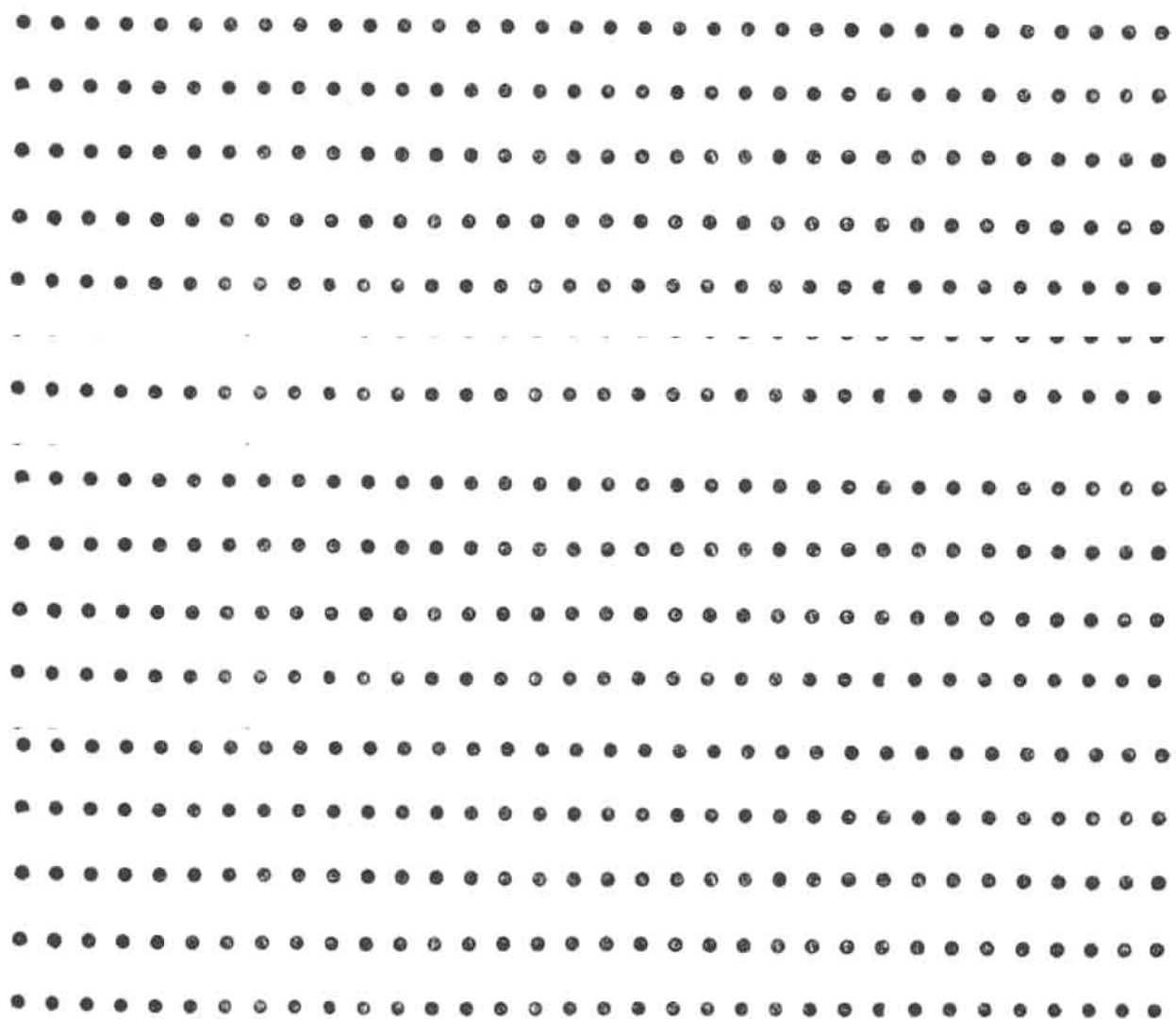
東京都文京区音羽町3丁目19番地
電話(東京)(941)3111振替(東京)72732

落丁本・乱丁本はおとりかえします

東都ミステリー

黒潮の偽証

高橋泰邦



この本には懸賞金がかかっています

犯人の名前と〇〇〇〇〇〇の個所をあてていただくわけですが（二〇四頁参照）、かといって本篇はいわゆる「犯人あて」小説のように解決篇が必要な未完の作品ではありません。フェアな本格推理小説の興味をより一層楽しんでもいただくために、作者とも相談の上ささやかな賞金をつけました。単行本の性質上多少の制約もありますが、左記によりふるって御応募下さい。

○応募方法 挿入のハガキ或は官製ハガキに犯人の名と〇〇〇〇〇〇の個所を記入して「東京都文京

区音羽町・東都書房ミステリー係」宛お送り下さい

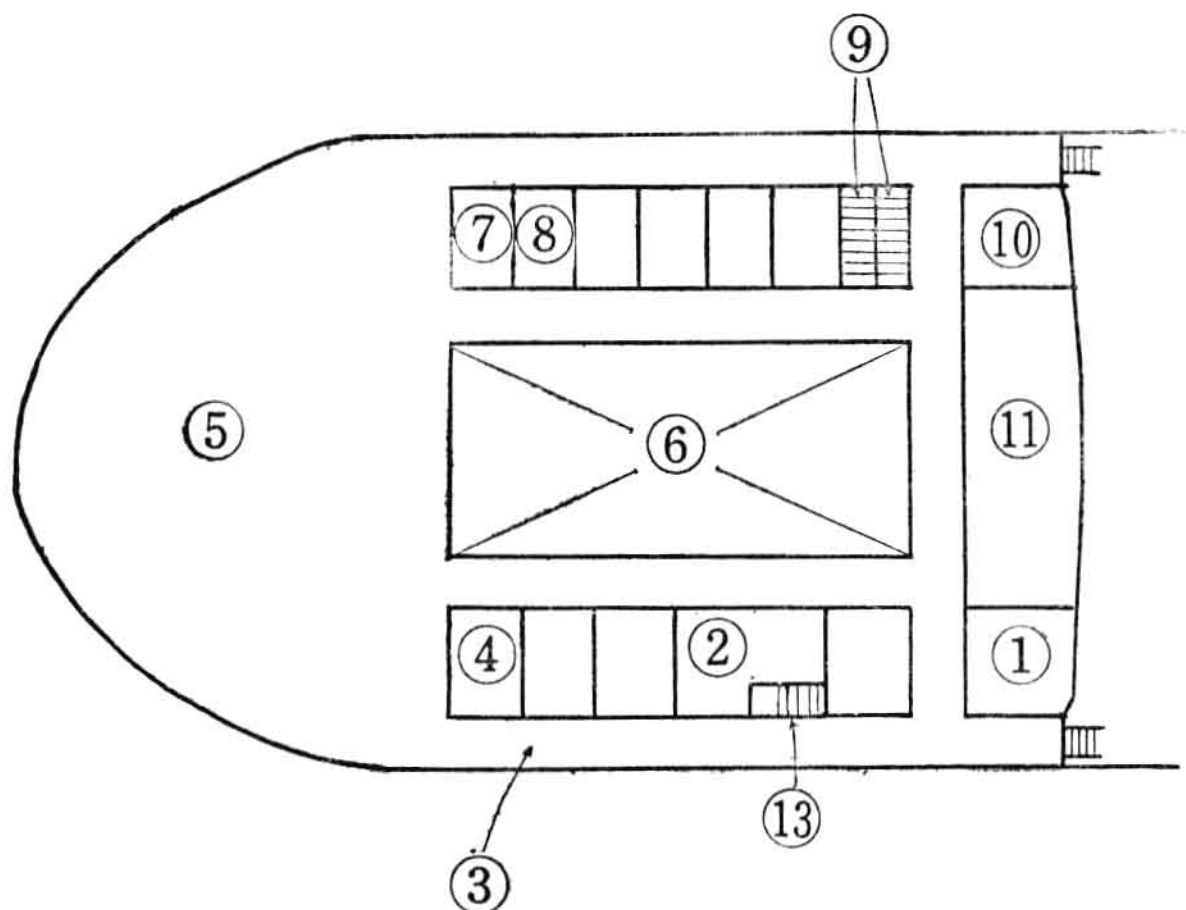
○締切 昭和三十八年十二月三十一日

○発表 昭和三十九年二月発行予定の東都ミステリーNo 50

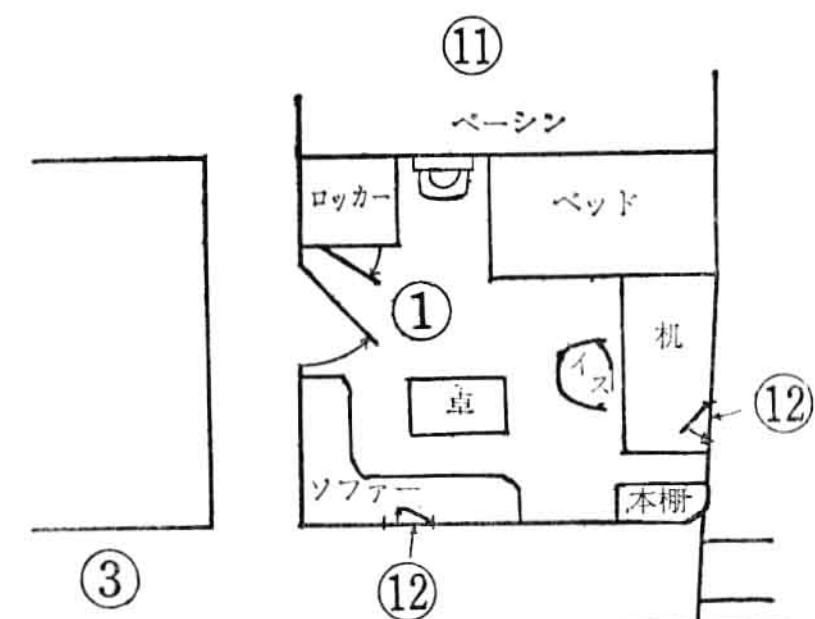
○賞金（一等三万円一名） 二等二万円（十名） 正解者多数の場合は抽籤によります

一航室および居住区 見取図

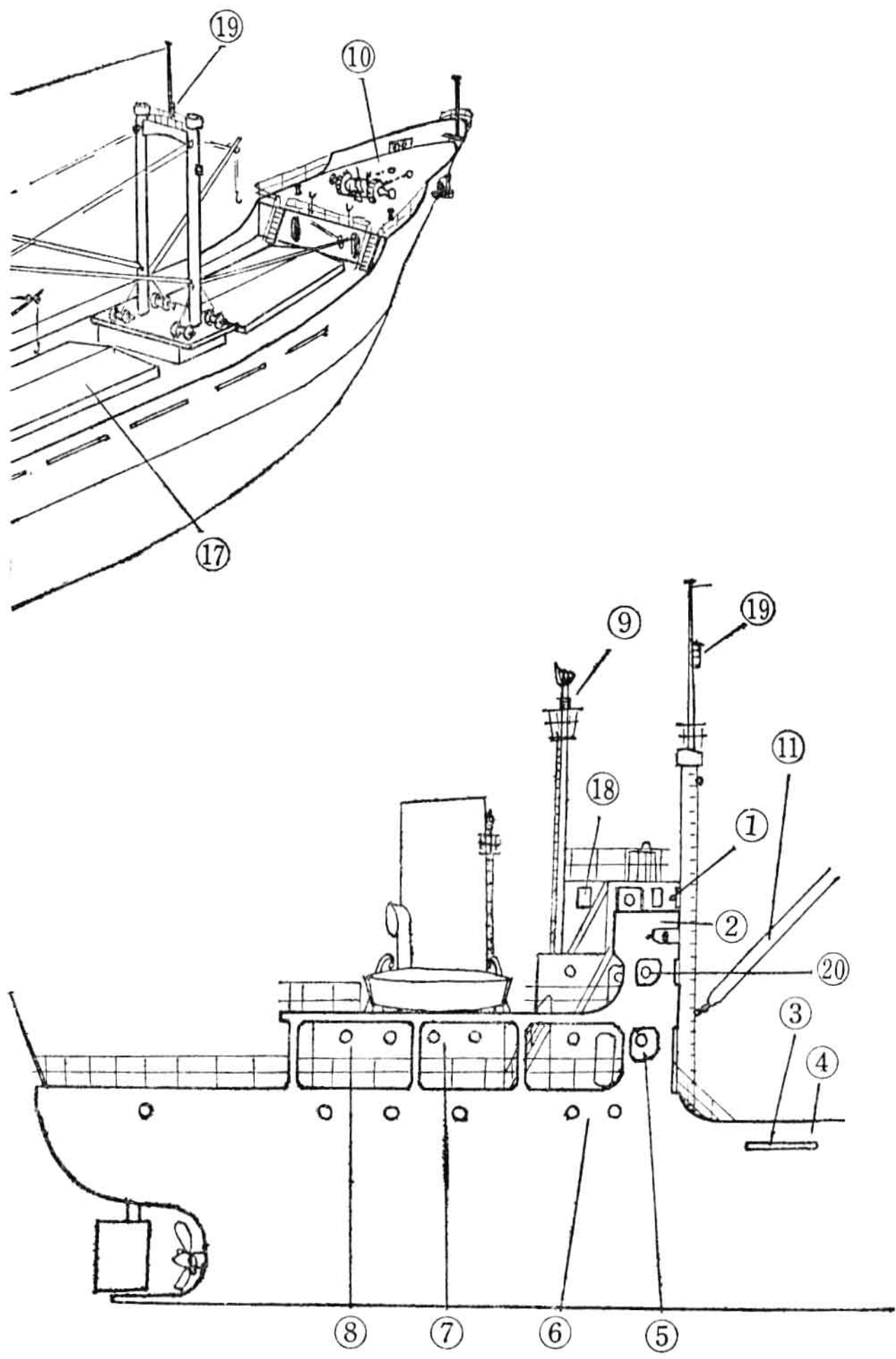
(著者図)



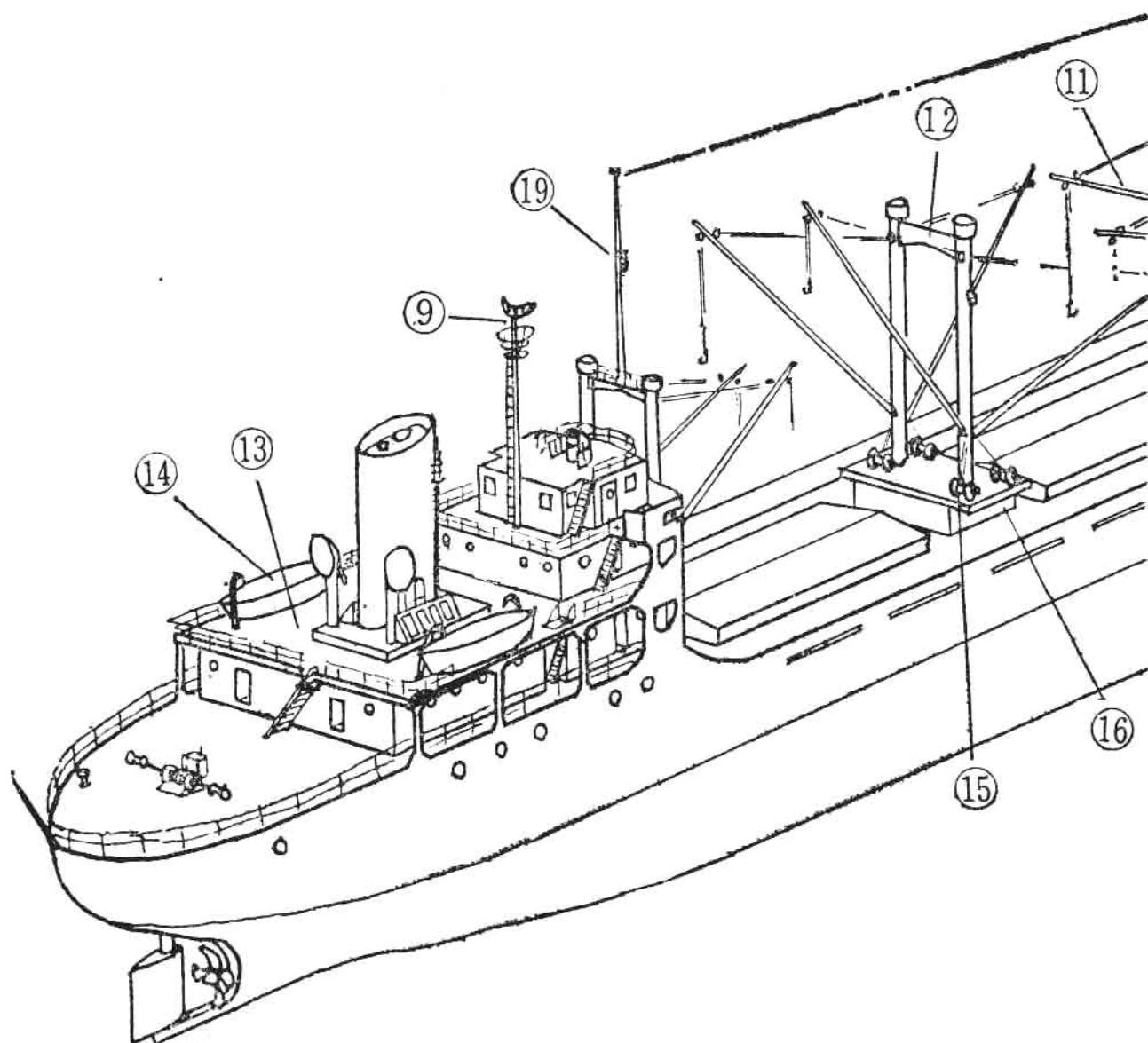
- ① 一航居室
- ② 調理・配膳室
- ③ 通路
- ④ 予備船室
- ⑤ 船尾甲板
- ⑥ 機関室囲壁
- ⑦ 便所
- ⑧ 浴室
- ⑨ 階段 (内部)
- ⑩ 機関長居室
- ⑪ サロン
- ⑫ ポルト (丸窓)
- ⑬ 升降梯子
(ボート・デッキへのぼる)



船尾機関型 (著者図)



寿南丸見取図



①ブリッジ(操舵室)

②張出し

③放水孔

④ブルワーク

⑤一航居室

⑥普通船員居住区

⑦調理室

⑧予備船室

⑨レーダー・マスト

⑩船首楼

⑪デリック

⑫鳥居型デリック・ポスト

⑬ボート・デッキ

⑭救命ボート

⑮ウインチ

⑯ウインチ・テーブル

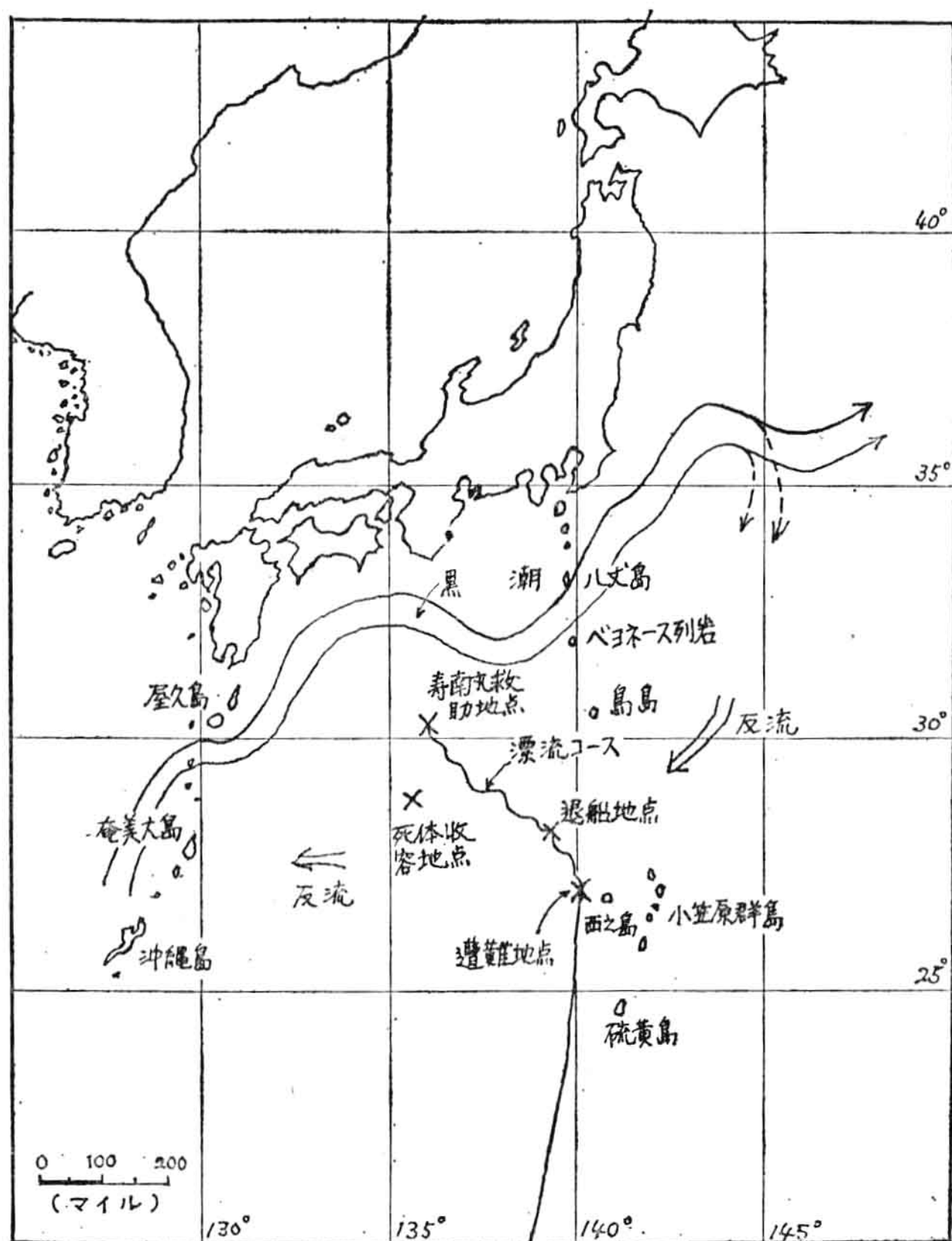
⑰船倉口

⑱海図室

⑲マスト灯

⑳船長室

寿南丸漂流コースと 潮流の関係図 (著者図)



装幀 中島靖侃
構成 福島祥介

プ ロ ロ ー グ

日本列島を、南へ離れると、そこには気が遠くなるほど広大な、深青色の沙漠がひらける。

この沙漠のなかを、くねくねと、百マイルもの幅と、アマゾンの二百倍もの流量をもって、黒と見まごうほどに濃い藍色の、深く澄みきった、暖い大河が押し流れている。

日本海流、いわゆる『黒潮』である。

黒潮は、しかし一つの帯のような単純なものではない。ところどころに、水質のちがった水塊が、モザイ

クのように接し連なっていて、流れのなかには、無数の渦と反流が、唐草模様のようにもつれあいながら、それらの集まった総体が、一つの河にたとえられるにすぎない。あざむきに満ちた青い沙漠の河である。

コバルト色の、深く澄んだ海面を、ゆらゆらと北西に向う、一隻の貨物船がある。

白い油絵具をべっとりとして、厚く重ねたような、わけ波や航跡を、そこに期待した眼は裏切られる。

今日はおだやかな波と風と、時速三ノットほどの海流に身をまかせて、船は漂流しているのである。

船首の両わきと、船尾の丸い突出部に、白いペンキの横書きで、『寿南丸 J U N A N M A R U』と読める。

船内は、廃墟のようにうつろな静けさだ。もちろん、エンジンは停止して鳴りをひそめ、自力で、波をわけ、風にさからい、海流を横切る意志を完全に失っ

た船は、自然のおきてにしたがって、当然、風に横向きになった。

左舷に、三十度ちかく傾斜している。

局地的な風とは関係なく、はるか南の海からわたってくるウネリに、規則正しい間隔で揺りあげられるたびに、寿南丸は、周期の小さい急速なローリングを、マストの先きの振れ方に見せて、横ばいに押し流されているのだった。

しかし、漂流船に相違なくとも、もし、折れたマストやデリックや、錆の腐蝕でばたばたにただれた舷側の外板や、器物の散乱した居住区^{ハウス}のなかなど、荒れ果てた、幽霊船もどきの情景を想像するなら、またしても裏切られる。寿南丸は、マストの黄ぬりも、舷側の黒ぬりも、船橋楼や居住区^{ハウス}の白ぬりも、まだペイントのつやが消えていなかった。船室内の木造部分は、木目を生かしたラッカー仕上げで、傷もしみも見当らないだろう。デッキや舷側の鉄板は、まだ新しい鉄がに

おいそうに思われる。

船齢は、二年そこそこであろう。ようやく使い馴れて、船体もエンジンも、これからいよいよその性能を、フルに発揮できようという、人なら青年期のさかりを迎えたところである。だから一そう、この無力な漂流の姿は不可解であり、この人気ない船は異様である。

よく見れば分るとおり、整然としたなかに適当な乱れもあって、つい今しがたまで、たしかに乗組員の公私にわたる生活が営まれていたにちがいない、人間臭さが漂っている。活気にみちた航海の途上で、とつぜん人間だけが、蒸発して消滅してしまったような、急には眼を信じがたいたたずまいだ。

実は、この寿南丸の船内に、たった一人、生きた人間が、それも平然と——少くとも見かけは平然とした様子で——自由に、動きまわっている。いま、船橋楼のてっぺんの、操舵室をのぞけば、その人間の姿も行

動もうかがうことができる。

がっしりとした、肩幅のある後ろ姿で、男は、海図テーブルにかがみこみ、航海日誌の一ページに、ペンを走らせている。太いうなじに、潮焼けの色が深い。

四月十七日。

快晴。

風向、南西。

風力、二。

現在（午後五時四十分）の位置は、ベヨネース列岩の南東約二百四十マイルの地点と推測する。

漂流二日目が暮れようとしている。その後、船体に異状なし、傾斜角度は遭難当時から変化なく、左舷にほぼ三十度。天候に急変のなにかぎり、本船に差迫った危険はないだろう。すでに、救助船は出動しているものと思われるが、目下のところ、連絡の方法なし。現在まで、海

上および上空に視認した船影、機影はない。

備考

午後二時ごろ、居住区^{ハウス}のなかで、人間のうなり声と思しき音と、硬い器物の落ちて割れるような音を聞く。ただちに船内を調べたが、音源は発見できなかった。むろん何かの聞きちがえと思う。幻聴かとも考えたが、小生の心身の状態は正常である。

もっとも、狂気の者も、自分の異常はわからないが……。

彼がペンを走らせる間、左舷がわの窓から射し込んだ西日が、操舵室のフロアと、操舵機やレーダの側面に、窓わくの影を生んで、影は、船の揺れにあわせて位置を移していた。やがて、その日当りが眩しさを失い、赤味を帯びはじめた。

白ぬりの船橋樓の居住区の、西に向いた側面が、才

レンジ色に染まり、舷側が深く脚を入れるところから、遠く、さえぎるもののない西の水平線まで、無数につらなる波山と、円く一つづきのウネリの背に、さっと朱が流れた。波くぼに、かげが濃さをまして、やがて煤色すすいろの夜の気配をただよわせはじめる。途方もなく大きな円弧で、鋭く空と接した今日の水平線に、四月十七日の太陽が沈んだ。

しばらくは、まだ西空に夕映えが明るいうちに、もう海面には暮色がひろがり、ゆらゆらと漂流する寿南丸の、大きく傾斜した船影が、次第に影絵になって、船室の丸窓の一つだけに、にぶい灯色がともったが、いつの間にか深まった夜色の奥に、やがてすべては溶けこんでしまった。

第一部

1

四日前――

つまり、四月十三日の、午後二時三十分。

寿南丸は、小笠原群島の南からのとっつき、母島列島の西方約六十カイリの海上を、東京港へ向けて北上しつつあった。

海は時化^{しけ}ていた。

正午から、平常どおり、二等航海士の唐崎浩三^{からさきこうざう}が航海当直に立っていた。○時――四時が、午前も午後も、二等航海士の当直時間である。船内の日課は、何かの

支障が起きないかぎり、つねに規則正しく、いくらかだ勢気味に果たされ、繰り返されている。

唐崎は、海図テーブルにひろげられた『南方諸島』の海図をのぞきこみ、両脚器を立てたり、船長が引いた針路と母島との距離を測ったり、三角定規をすべらせたりしていたが、やがて背をもどし、かたわらの壁にかかっている船橋時計を、ちらりと見上げた。

そのとき、ぐらっと一きわ大きく来た横ゆれに、体のバランスをくずして、テーブル沿いによたついた。

「ちちっ！」

苦い顔で舌打ちをした。

ときどき、急に大きな横ゆれが来るので、動揺に体を合わせて重心を、ほとんど反射的に移している、馴れきった腰つきの彼も、今日ばかりは調子を取りそこなうて、いまましいがよたつくときがあった。なるほど、舌打ちは彼の癖ではあるが、癖とばかりは決められない、変に当てつけがましい、苦い表情がは

しった。

「……午後二時三十分。……母島の西、六十マイルで正横……」

いくらか気分のこじれを独り言にひびかせて、唐崎二航は、ひらいた船橋日誌に鉛筆をつけた。ポツンと芯が折れた。

「ちちッ！」

図体に似合わず、気の短いたちのようだ。

変にきつい起き方、傾^{かし}がり方の、すばやいローリングをくりかえし、ときたま、今のように、急に大きな揺れがまじる。原因は分っている。一つには、秒速十三メートルをこえる風によって起こされた波と、この風とは関係なく南から寄せてくるウネリとが、波山を重ねるときに、思いがけない高い波が立ち、寿南丸の船体を大きく上下させるためであり、いま一つには、寿南丸自体が、ボトム・ヘビーであるためなのだ。

ボトム・ヘビーとは、つまり、船底が極端に重く、

重心が低すぎる状態をいう。たとえば、底の重すぎる『起きあがりこぼし』である。こういう起きあがりこぼしを揺すぶってみれば分ることだが、頭の振り方は、周期が小さく、直立の姿勢にもどる速度が妙に速い。寿南丸の、このときの船脚の釣り合いがちょうどそれだった。原因は、積み荷にある。寿南丸は、南洋のパラオ諸島にあるアンガウル島から、糞化石のりん鉱石六〇〇〇トン、船倉ふかく積んでの帰りだった。鉱石は重い。満船状態といっても、船倉の上半分は空っぽで、船底ばかりが重いのだ。

たしかに、不快なローリングだった。そして、ローリングを一ばん強く感じるのは、高い位置にいる人間、つまり、ブリッジで当直中の人間ということになる。

「へたくそな積み方をしやがって」

と、芯の折れた鉛筆をほうり出し、遠くまでころがって行くのを、硬い眼の光で追いながら、ふと口を

ついて出た唐崎のつぶやきが、彼と背中あわせに、舵輪をにぎって正面をきっている、操舵手の前原博に聞きとれたかどうか。もし聞きとれても、へたに分ったげな合槌をうつ男ではない。副直の操舵手の今川が、聞こえるところにいることを、そして今川が、一等航海士の木戸に眼をかけられて、恩義を感じていることをも、とっさに考え合わせるだけの小利口さを、前原はちゃんと持ちあわせていた。彼はただ、むつつりと、舵輪台に突っ立っているだけだった。

副直の今川操舵手は、気をきかせてというよりは、手持ち無沙汰をまぎらすために、さっき、土びんを下げて調理室に降り、いま、熱湯を入れて帰って、三人分の茶わんに番茶を注いでいるところだった。

操舵手は、つねに二人一組で、四時間の当直中、交代で舵を取る。

「ちちっ！」

いくど目かのローリングが、また一きわきつかっ

た。ちょうど、裏部屋にあたる海図室へはいりかけていた唐崎二航が、そのドアかまちに肩をぶつけた。

「やけに、がぶりやがる」

と、弁解めいたひとりごとをいって、唐崎は海図室に姿を消した。

船首と、風上がわの舷側で、波がくだけ、白い泡立ちのはね波になって噴きあがる音だけが、何度かくりかえされる間があった。その間も、寿南丸は、全速で回転するディーゼル機関のこまかい振動で、窓ガラスをビリビリ鳴らしながら、ぐらっと傾がったかと思うと、あまり深く肩をさげずに、すばやく身を起こし、勢いこんで反対側へかたむき、また、浅い角度から急速に復原し、だ勢をかって、ふたたび向う側へぐらっと傾斜していく。胃袋の中が、すかすかするような、ボトム・ヘビー特有のローリングだった。

唐崎二航が海図室から出て来た。ちらっと、船橋時計へ眼をやり、誰に言うともなく、

「この時計、内地で停泊中に、修繕させんといかな。また、十分進んどるぞ」

と言って、船橋日誌を開き直し、いま書き入れた時刻を訂正した。正確な時刻を、念のため、クロノメーターで見て来たのである。

副直の今川操舵手が、茶を運んできて、唐崎二航と前原操舵手にわたし、空の盆をさげてもどりがけに、船橋時計の進みを直していった。

やがて、操舵室で、三時を告げる四点鐘が鳴った。

カン・カン——カン・カン……と、二つずつ連打するのは、いずれの船も同様である。時鐘は、十二時半、四時半、八時半を一点として、三十分ごとに一点ふえる。そして、当直交代の、十二時、四時、八時が八点になる。そのほかに、交代十五分前に、一点打って船内に知らせる『コーターベル』と呼ばれる点鐘がある。当直員には嬉しい鐘、交代員にはゆううつな音色である。

いま鳴ったのは四点。三時である。当直時間の四分の三が過ぎた。心なしか、前原操舵手の点鐘する手にも力はいった。

だが、この日の寿南丸にとって、それは意外な運命の、幕開きの鐘でもあった。

四点鐘から五分ばかりが経った。風はつのる一方で、風力計がときどき十五メートルを越える数字を示していた。前面窓から見はるかす海面の、波はますます大きくなり、波がしらぐだけでできた白いあわが、すじをひいて風下に流されはじめた。

陸上ならば、樹木全体が揺れさわぎ、人は風に向かって歩きにくくなるころだ。

だが、四八〇〇トンの寿南丸にとって、これしきの時化は、ふだんなら、格別どうということはない。外洋では、こんな時化は毎度のことである。それが、ボトム・ヘビーの状態にあったいまの寿南丸には、格別の意味があった。

一般には、ボトム・ヘビーの状態では、復原力が強いことから、安定性は大きいのだが、これを逆用して、船をいたぶる手だてを、海はちゃんと心得ていた。

三時五分を少し過ぎたと思われるころ、船尾機関型の寿南丸の、六、七十メートルも突き出た長い前甲板に、がっちり蓋を閉ざしカバーをかぶった四つの船倉の、どれだったかは急に決めかねたが、とつぜん、ドット、内部から舷側に重量物がぶち当たる、深くこもった騒音が聞えた。

「やったア！」

とっさに、唐崎二航が前面の窓へ飛びだしていった。言葉にも動作にも、まるで待ちかまえていたかのような、反射的な素早さがあった。彼は窓ガラスに顔を押しあてて、内部の見えるはずもない、カバーのかぶった船倉口を見つめた。

音はそれきりだった。しかし、唐崎の姿勢に、安心

した気配はない。遅れて肩を並べた副直の今川操舵手も、息をつめていているようだ。舵輪をにぎる前原は、その場を離れられないもどかしさを眼にこめて、二人の肩越しに前甲板をうかがった。

次の大きなローリングで、どうなるか——三人が息をつめて待ちかまえるのは、それだった。

「船長を呼べ」

低いが鋭い唐崎の声と、今川操舵手がはじかれたように振りかえって駆けだすのと、ほとんど同時だった。今川は海図室の出口で、船長とはちあわせをしかけた。音を聞くと同時に、船長室を飛びだしていたにちがいない。やはり、反射的な行動と受けとれる。広兼船長は、海図室から操舵室にかけこみ、正面の窓ぎわで唐崎と並んだ。ドドンときてから、ここまでが、ほんの一瞬間のことだった。

横に並んだ前面の窓に一つづきの水平線が、船首を支点に、シーソーをくりかえしていた。いくどか、波